

博士学位論文内容の要旨

学位申請者氏名	朝日 眞美子
論文題目	源氏物語の表現と和歌 後撰集を起点とした展開
論文審査担当者	主 査 中前 正志
	審査委員 大谷 俊太
	審査委員 坂本 信道
	審査委員 滝川 幸司
<p>『源氏物語』には多くの作中人物が詠んだ和歌が載せられる。また、文章自体にも当時の和歌を踏まえた表現がなされる。この点に関しては多数の先行研究が備わるが、本論文は、『後撰集』の和歌を起点として、『源氏物語』の表現と和歌について検討している。</p> <p>本論文は序論、本論第一編・第二編・第三編、結論から構成される。</p> <p>本論第一編「『うつせみ』をめぐる表現」の第一章「光源氏の『うつせみ』の歌について」では、光源氏の「うつせみの身を変えてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」（空蟬巻）歌を取り上げ、「うつせみ」が「身」を変えると表現されたことの意味について論ずる。通説では「うつせみ」が「身」を変えると、蟬の幼虫が抜け殻になること、つまり、幼虫が脱皮して抜け殻という痕跡を残すこととして捉えられている。しかし、『源氏物語』や他の文学作品などにおける「身を変へ」の例は、在俗の身の上から出家者になることや社会的に成功することなど、「身」を変えることで、それ以前とは違う身の上になることに対して用いられている。また、『公任集』に『法華経』の提婆品に基づく歌があり、当該歌では竜女が男子に「身」を変えることについて、「身をかへて」という表現が用いられており、竜であった「身」の痕跡を残す意味では用いられていない。これらの用例から、「うつせみ」が「身」を変えると、通説のように蟬の幼虫が抜け殻になるのではなく、幼虫（殻をかぶった身）が成虫（羽のある身）に変わることであると考え、光源氏の歌では、空蟬の君が脱ぎ捨てた小袿のみに執着するのではなく、去ってしまったこの女性に、なおも思いを寄せる光源氏的心情が描かれていると解釈する。</p> <p>第二章「『後撰集』の『うつせみ』の歌について」では、衣の喩えに「うつせみのから」という言葉を用いた『後撰集』所収の平中興女の歌「いまはとてこずゑにかかるうつせみのからを見むとは思はざりしよ」（恋歌四）と、その歌に対する返歌「忘らるる身をうつせみのから衣返すはつらき心なりけり」（同、源巨城）が詠まれた背景と、歌の詠み手である男女の心情について論じ、第一章で検討した光源氏的心情と比較する。平中興女歌の詞書には、源巨城を「つらくなりにける男」と記しており、源巨城歌では、衣を返す女性の方こそが「つらき心」だと詠まれていて、お互いに相手の冷淡さを問題視している。一方、この贈答歌と同様に衣の喩えに「うつせみ」を用いた光源氏の「うつせみ」の歌（第一章で検討）は「なつかしきかな」と、相手の女性</p>	

を慕わしく思う心で締めくくられており、この歌を見た女性の方（空蟬の君）も涙を流している。『後撰集』の男女間の冷淡さとは異質の、相手を思う心情が描かれており、対照的である、と結論づける。

第二編「『人笑へ』をめぐる表現」の第一章「『源氏物語』の『人笑へ』について」では、『源氏物語』の「人笑へ」（「人笑はれ」も含む）の合計五十八例の用例を検討し、それらにおける主体に着目して論ずる。『源氏物語』の第一部、第二部では「人笑へ」を気づかう主体の多くが娘の父親であるのに対し、第三部では二十九例中、二十三例において娘の母親や、大君、浮舟などの女性が主体となっている。また、東屋巻以降の十例の主体はすべて女性であり、そのうち五例は浮舟が自己の「人笑へ」を危惧する例である。そこから、第一部から第三部にかけて「人笑へ」を気づかう主体が変化していることを指摘する。

第二章「『後撰集』から『源氏物語』へ『人笑へ』の場合」では、『後撰集』において「人笑へ」が詠まれた二首の歌と、『源氏物語』に見られる浮舟の「人笑へ」をめぐる表現について検討する。『後撰集』の二首の歌とは、「よろづ世を契りしことのいたづらに人笑へにもなりぬべきかな」（雑歌二、藤原敦敏）、「音に泣けば人笑へなり呉竹の世に経ぬをだに勝ちぬと思はん」（恋歌五）である。前者、敦敏の歌については、当該歌に対する大輔の返歌（雑歌二）とともに、浮舟巻における匂宮の歌に摂取され、後者については、同じく浮舟巻における薫の歌に摂取されている。そして、これらの男性の歌のあと、「人笑へ」を女性の浮舟が心内語で繰り返すようになり、この語とともに入水自殺の決意が導き出されており、それはさらに、浮舟の出家後の心情にも影響を与えていると述べる。

第三編「『心の隈』をめぐる表現」ではまず、『古今集』に一例、『後撰集』に二例、『後拾遺集』に一例見える「心の隈」について概観する。そして、『後撰集』の「人はかる心の隈はきたなくて清き渚をいかで過ぎけん」（恋歌五、少将内侍）と、その返歌「誰がためにわれが命を長浜の浦に宿りをしつつかは来し」（同、藤原兼輔）を検討し、女性が男性の「心の隈」を問題としていることを指摘する。

そのうえで第一章「『源氏物語』の『心の隈』について」では、『源氏物語』においては、心の中の秘密の部分やさす「心の隈」をなくそうとする態度が、「世にかしこき聖」（薄雲巻）とされる夜居の僧都や、「俗聖」（橋姫巻）と称される、八の宮を慕う薫の発言に見られることに着目して、次の通り分析する。前者、夜居の僧都は、誰もが口にすることができない冷泉帝の出生の秘密を、自己の心の中にある「隈」をなくそうと考えた末に、直接、帝に奏上している。また後者の薫は、八の宮の娘である大君に対して、心に「隈」を持たない関係を望むという、在俗では想像がつかないあり方を志向することが描かれている。しかし、その後、薫は匂宮が浮舟のもとに通うという事実を知り、匂宮に対して「心の隈」を持ちたくないために、中の君への恋情を自制してきたことに対して、愚かであったと後悔し、「聖」的な側面を失っていく。

第二章「『後撰集』から『源氏物語』へ『心の隈』の場合」では、『後撰集』の「人はかる心の隈はきたなくて清き渚をいかで過ぎけん」（恋歌五）という少将内侍の歌が女性の視点から男性の「心の隈」を問題としている点に着目しつつ、『源氏物語』の「心の隈」の用例について検討する。その結果、『源氏物語』においては、少将内侍の歌と同様に、表面的なことに惑わされずに男性の登場人物の「心の隈」を見つめようとする視点があり、それは男性にとどまらず、

女性の登場人物である紫の上にまで及んでいると考察する。

結論では、「うつせみのから」・「心の隈」という『後撰集』では女性によって詠まれた言葉が、『源氏物語』においては、男性の登場人物の歌や発言内容、心内語に限定されて用いられている点、また、反対に、「人笑へ」については、『後撰集』では三角関係に苦しむ男性の歌において詠まれ、『源氏物語』では薫と匂宮という二人の男性の板挟みになって苦しむ浮舟という女性の心内語で用いられている点に、まず着目する。また、「うつせみのから」・「人笑へ」・「心の隈」という三つの言葉が、『後撰集』では男性にのみ用いられているのに対して、『源氏物語』では女性に用いられていることから、『源氏物語』が「女についての、女によって作られた、女のための物語である」(玉上琢彌)という側面を持つと捉える。そして、男女が『後撰集』と『源氏物語』とでは「逆」であるということは、『源氏物語』の表現の根底には、女性は男性と同じ感覚を持ち、恥の意識のために身を捨てる覚悟も持つものだということを、女性だけではなく、男性にも理解してほしいという願いが込められていると論じる。最後に、和歌などの引用に関する研究においては、古注釈の時代から「同じ」であることが重視されてきたが、今後は「逆」であることに着目しての考察が必要であることとその意義を述べて、展望としている。